

結草

kusamusubi

publishing house: 2-19-52 Moriyama Kanazawa
Jodo Shinnyu Jhokoji tel/fax 076-262-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2013.03.01

「仏法聴聞」もとの阿弥陀のいのちに帰す

道因寺住職

相馬 豊

おはようございます。今ほどご紹介いただきました、白山市の道因寺の住職しております、相馬豊と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

仏法聴聞

今年もご縁をいただいたなかで昨日、今日という二日間の中ですけれども、やはり私たちにとりまきは、「仏法聴聞」という、このことがもう一度確認をしていかなければならない事柄だと思います。ややもいたしますと、私たちは仏法を聞

自分の聞きたいことを聞いていく
ありかたです。

しかし「聞」というのは、そうではないんですね。「聞」というのは、自分の思いの中にあるながら、記憶の中に忘れ果てていたことを呼び起こしてもらうのが「聞」なのです。自分の思いの中で今日まで生き続けてきたその中で、大切なこと、忘れ果てていたことを呼び起こす、その声を聞く。まさに聞こえてきた声に自分が「あっ」と驚いていく。それを「聞」というわけですね。

私たちの出発点

昨日も申しましたように、自分の思いの中で今日まで生き続けてきた中で私たちは何を一番忘れてしまったかと申しますと、生まれたという記憶です。生まれた記憶なんですよ。もうすでに私たちは今日まで生き続けてまいりましたけれども、どれだけ自分の体験、経験したことを一つひとつ記憶の中を呼び起こしてみても、自分自身の中にはっきりとない記憶が生まれた時の記憶です。生まれたという記憶がない

のです。ただし、両親、祖父母、兄弟、姉妹は私が生まれた記憶を持っていません。しかし、その当人である私自身が生まれたという記憶を持っていないんです。つまり一番大切なことを私たちは忘れていくんです。その生まれたということが、私たちの出発点です。

吉凶禍福

今日まで私たちは何を追い求めてきたかといいますが、今から二千五百年前にインドで生まれたお釈迦様の言葉として『仏説無量寿経』というお経の中でこういう言葉として表してくれています。

吉凶禍福、競いておのおのこれを作す。一も怪しむものなきなり。

(真宗聖典・六一頁)

私たちが生まれてから今日まで何を追い求めてずっと歩んできているかといいますが、「吉」と「福」というものを追い求めているのではないのでしょうか。その

「吉凶禍福」というものに私たちはもすごくこだわりを持ちます。そして「競いて」です。お互いが競いてこのことを求め続けてきた。ところが、悲しいかなや「一も怪しむものなきなり」です。

私たちが今日まで具体的に追い求めてきたものは何かと申しますとこの「吉凶禍福」ということです。じゃあ、具体的にこの「吉凶禍福」の「吉」と「福」とは現代でいうならば何かといえますと、裕福、長寿、健康。これを私たちは「吉」「福」として追い求めているのではないでしょう。か。どうすれば私の家族、私を含めて裕福な生活ができるだろうか、どうすれば私や家族が長生きできるだろうか、そして健康でありたいと。そのことをどこまでも追い求めてきている、その代表的なものが裕福、長寿、健康で表されるのではないでしょう。

一も怪しむものなきなり

しかし、お釈迦様の言葉を聞いたお弟子さん方は、この言葉を大事にされたんですね。「一も怪しむものな

きなり」。誰も疑わないというのです。私たちは、まさに裕福と長寿と健康を追い続けているけれども、それが果たしてどうなんだろうか怪しむ、そういう疑いを持ったことがないということですよ。

確かに裕福でありたいし、長生きはしたいし、健康でありたいのです。しかし、そのために迷い続けているのです。どうしたら裕福になるだろうか、どんな方法があるだろうか。様々なかたちで迷い続けます。

長寿もそうです。長寿と健康、どうしたら長生きできるだろうか、どうしたら不治の病にならないで済むだろうか、求め続けます。そしてこの長寿と健康を害するような「凶」や「禍」は嫌です。裕福にしても私の生活を脅かせるような「凶」というものや「禍」は来てほしくない。このように私たちは、生まれてから今日まで「吉凶禍福」にこだわっている生き方をしているといえるのではないのでしょうか。またこれが悲しいかなや、私たち日本人の体質になってしまいました。この「吉」と「福」を求めている在り方はいつから

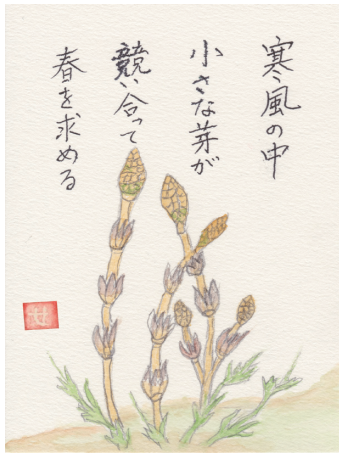
はじまったかという、わずか三歳、四歳、五歳、六歳。ここからもう植え付けられています。私たちはもう既に吉凶禍福ということはこの日本という国の節目節目の行事の中で植え付けられています。大きなものが二つあります。

一つは七月七日の七夕さん。もう一つが節分です。七夕の時に笹の葉に短冊を書きます。その短冊に書く言葉はすべて私にとつての吉、福ということを書きます。凶になるもの、禍になるものを子どもたちは書きません。また節分の折、鬼のお面をつけた保育士の方に向かって小さなお子さんが豆をまきます。あるいは我が家に帰ってきてても豆をまきます。その時に幼い子どもたちは、何という言葉をはきながら豆をまいているのでしょうか。「福は内、鬼は外」もう吉凶禍福です。わずか三歳、四歳、五歳、六歳の子どもの中にももうすでに吉凶禍福というものを植え付けてしまうのです。「鬼は外、福は内」鬼は外へ行くと、その鬼というのはどこへ行つて欲しいのか。外なんですけれども、単に外ではない。

どこへ行つて欲しいかというと、隣の家なんです。鬼は隣の家へ行つて欲しいわけですよ。我が身というものをいかに大事にしていくか、自分の都合に合わせて自分のやつていることを正しいと思ひ込んでいる在り方。それをお釈迦様の言葉を聞いた方々は「吉凶禍福、競いておのこのれを作す。一も怪しむものなきなり」と。現代の私たちの在り方をもうすでにお釈迦様の言葉として語りかけられているんですよ。

我が身を聞く

そうすると、「聞く」とはまさに我が身を聞いていくということですよ。向こうからくるものを、教えを自分のものとして取り込もうとするのではなくて、言葉の響きを通して「あつ、これは私のことではないのだろうか」。そこにもう一度「一も怪しむものなきなり」、疑いをもつてみるということですよ。なぜ疑いをもつてみないといけないのかと申しますと、裕福、長寿、健康を求め続けたとしても、それは一時なんですよ。最終的にこのことが満足いく



古村節子

かというといかないのです。なぜならば、生まれたからです。生まれたという事は、必ずそこに死すべき身を持つておるのです。じゃあ、この死すべき身とは、誰のことか？これは私なんです。裕福、長寿、健康を求め続けても、これは一時ですよ。一時の出来事だけでも最終的に私たちが自分というもので確認をしなければならぬのは、死すべき身を生きているということですよ。それも生まれたという記憶もないのに、死んでいかなければならないということですよ。その身をいま私はここにいただいているのです。

その私というものをもう一度確認してくれませんか、それが親鸞聖人、蓮如上人がいわれた称名念仏なんですよ。「称」というのは、「となえる」

という漢字だけれども、その称える南無阿弥陀仏の中には聞かなければならないものがあります。「聞く」ということが大切なんです。何を聞くのか。それは願いとなったものです。その願いとなったものを私たちは聞いていかなければならない。いつまでも私たちは吉凶禍福を追い続けているけれども、それだけでは我が身が生きている証にはなりませんよ。一番大切なことをどこかに忘れ果てていたのではないでしようか。

阿弥陀の御いのち

死すべき身を生きているとはどういうことなんだろう。仏の願いは、私にどういふ言葉をかけてくれるのだろうか。そのことを真宗の先輩の方々が現代の私たちに言葉として残し、伝えてくれております。

ひとつは『安心決定鈔』という本の言葉です。蓮如上人は「この本は読んでも読んでも飽きがこない」、「まるで言葉の宝物がそこにつまっております」と、こう言われた。その『安心決定鈔』の中にこんな言葉

がでてまいります。

しらざるときはのちも、阿弥陀の御いのちなりけれども、いとけなきときはしらず、すこしごさしく自力になりて、わがいのちとおもいたらんおり、善知識、もとの阿弥陀のいのちへ帰せよとおしうるをききて、帰命無量寿覚しつれば、わがいのちすなはち無量寿なりと信ずるなり

(真宗聖典・九五九頁)

まず、そこに私たちが忘れ果てていたことの大事さを表現されています。冒頭の「しらざるときはのち」といふ言葉です。「しらざるとき」私たちがいいますならば、自分が生まれたという記憶を持ち合わせていない、または忘れ果てていた。生まれたいという記憶がない。しかし、生まれたという記憶のない私のことを先に生まれた方々は、何と私のことを呼んでくれたか。名前もついていない生まれただけの私を真宗のご門徒の先輩方は何と呼んでくれたか。「阿弥陀の御いのち」と言ったんです

よ。私がまだ名前もついていない赤子として生まれたばかりの子を見た時、「阿弥陀のいのちや」と言ったんですよ。私たち一人ひとりのことを。「阿弥陀さんのいのちが今生まれました」と、こう言われたのです。しかし、時代が変わりあるいは社会も変わり、人間の有り様も変わって、「阿弥陀の御いのち」といふ言葉遣いは使われなくなつたかわりに、使われだした言葉があります。これは皆さんも聞きになられている、あるいは使われたことがあります。

「阿弥陀の御いのち」と言われた呼び方が次どう変わったかと申しますと、「授かりもののいのち」という言い方になりました。「授かっていたいのちや」と。「授かりもののいのちが我が家に生まれました」と。「阿弥陀のいのち」が「授かりもののいのち」に変わりました。

そして、その「授かりもののいのち」と言われた時から時間を経て現代という時代では、また言葉が変わりました。「できちゃった」になりました。時代社会、人間の有り様の中で言葉がものすごく変化してし

まった。しかし、私たちの生まれた時は、「阿弥陀のいのち」、「授かりもののいのちや」といわれたんですよ。それが生まれたということなんですよ。

いとけなきときはしらず

では「阿弥陀のいのち」、「授かりもののいのち」と言われたのは、いつまでだろうか。「いとけなきときはしらず」です。生まれて自分が赤ん坊であったということ知らない時なんです。その時は阿弥陀のいのちだったんですよ。母親にしがみつ

く さ む す び

いて、おっぱいをしゃぶり、オムツの中にウンチをし、オシッコをして、でも無邪気にこやかに「オギャー、オギャー」と泣いている、その時は私たちは本当に無条件で一人ひとりが受け入れられていた。

それが今度は一人ひとりが成長する過程の中で、寝返りがうてるようになって、ハイハイができるようになって、つかまり立ちをし、そして自分の足で歩き始めたところから少しずつ私たちの中に変化が起ってきます。それは三歳前にして、反

抗期を迎えるということ。自我が芽生えてくる。わがままを言うようになってくる。恥ずかしさを知る。そういう自我が目覚めた時に、私たちは「阿弥陀のいのち」と言っていたのが、いつの間にかかわってしまいました。どう変わったか。「こざかしく自力になって」です。自力になっていくんです。自分の力ということ。

自力

その自力ということを親鸞聖人は自力というは、わがみをたのみ、わがところをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまざまの善根をたのみひとなり

『一念多念文意』
(真宗聖典・五四一頁)

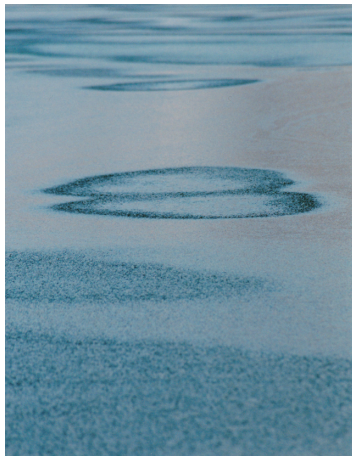
ここに「ひと」という言葉が出てきます。「ひと」とは誰のことでしょうか。自力をたのんでいるのは誰のことなんだろうか。「ひと」とは私なんです。いつの間にか「阿弥陀のいのち」、「授かりもののいのち」とい

われていたのが、身とところとちからと体験、経験に基づいた自らの力に頼る生き方をしたとき、私たちのなかに何が起るか。さきほどのこの「吉凶禍福」です。このことばかりを追い求めていく有り様になったわけです。

いのちそのものも、我が命、自分の命だから、自分の好きのように、わがままに、自分の思い通りに歩むことが私たちの有り様になってしまった。いつの間にか思い通りにならないものがあるということを忘れたのです。思い通りになるものを追いついていくのです。

ところが、思い通りにならないもの

「水輪」大竹春生



が、ここにあるんです。思い通りにならないもの。生まれてそして死んでいかなければならない身、これは思い通りにならないんですよ。これほど一番大きなものを抱えていながら、なぜか私たちはこちら(吉凶禍福)に向くんんです。だから「一も怪しむものなきなり」。一度疑って欲しいというのですよ。

もう一度本当に何が大切な事柄なのだろうか、生まれたということの記憶もないし、そして「阿弥陀のいのち」といわれたことも憶えていないし、「授かりもののいのち」と言われたことも憶えていない。我が身の力で今日まで大きくなってきたと思いついてる。そして思い込んだなかで、裕福、長寿、健康を求め続けていた私たち。その私たちの中にあって自分の思いの中に忘れられていることを呼び起こそうとしている声をどうしても聞いて下さい。それがまさに仏の願いです。

仏の願い

仏の願いとは、まさに忘れられていることをもう一度自分のなかに呼

び起こして下さいという言葉です。その願いが具体的に私たちの生活の営みの中でどういう言葉、文字として私たちに常にはたらきかけているかということですよ。

ひとつはこの言葉です。「**帰命無量寿如来**」。もう一つは「**天親菩薩造論説 帰命無碍光如来**」(真宗聖典・二〇六頁)の「**帰命無碍光如来**」。具体的に仏の願いが文字、言葉となって私の生活の中に呼び起こされていくというのですよ。私たちが何気なく言葉として読んでいる『**正信偈**』です。『**正信偈**』の一番最初の冒頭が「**帰命無量寿如来**」です。仏法聴聞の「聞」、「来たりてきこゆ」、この浄光寺の本堂に身を置いた時、自分の思いを超えて聞こえてくる声があります。私たちが本堂に入った時、まず声となって聞こえてくるのがお勤めなんです。勤行です。勤行の声を聞く、そこは単に声を聞くのではなくて、教えとなった言葉に出遇うていくんです。だから勤行というのは非常に大事なんです。お勤めに出遇うということが一番要なんです。お話を聞くことも大事だ

けれども、本来はお勤めに出遇うことがいかに大事か。声となったものにまず出遇うのですよ。

「**帰命無量寿如来**」、「**帰命無碍光如来**」、親鸞聖人は**帰命せよ**という言葉の中に必ず下には「**如来**」とつけているんですよ。そして「**寿**」と「**光**」。

「**寿**」と「**光**」が具体的に現れているのが、皆さんの正面のご本尊、あるいはそれぞれの自家のお内仏のご本尊、**阿弥陀如来**の立像、絵像。その後ろの**光**、**御光**。**光**がこうやって放射線状にずっと出ています。**光**の中に**阿弥陀**さんが浮き出されているような感じですよ。**阿弥陀**さんが**光**を背負っているのではなくて、**光**の中に**阿弥陀**さんが映しだされている。**光**、**四十八本**あります。仏の願いです。**寿**と**光**。まさにそれが**御光**となっていていつも私と真向きになっているわけですよ。**本尊**と**真向き**になるということ、**光**に**遇う**ということですよ。**光**に**遇う**ことによって、仏さんの**願い**に触れるんです。日常の中に忘れられていた自分が生まれたということに。そこに呼び起こしてくる。そのご本尊と私たちは毎日

出遇っているのですよ。

帰る

「**帰命無量寿如来**」、「**帰命無碍光如来**」。そこに「**帰命せよ**」と。「**帰**」という漢字があります。私たちがいうならば、**帰る**という言い方をします。私たちが浄光寺さんのこの報恩講のお話が終わりましたら、それぞれ三々五々ご自宅の方へ帰っていかれます。しかし、この**帰る**ということとは、やはり証が必要なんです。私が家の玄関に入ったから「さあ、私は帰って来ました」と私たちは思いがちですけれども、**帰る**ということとはそこには証明があるわけですよ。私が帰りましたという証が必要なんです。

じゃあ、どんな証か。これはちよつと一人暮らしの方ですとなかなか難しいんです。家族の方ですとまず帰るといふことは出発点があります。出発点があるということ、それぞれのお子さんが学校へ行く、家族の方が会社へ勤めに出ていく。その時に家に残る皆さんは、何という言葉をかけておられますか。学校に行

く子どもたちや、出勤する家族にむかって。朝。

「**いってらっしゃい**」です。「**いってらっしゃい**」があつて、はじめて成り立っていきます。そして「**いってらっしゃい**」と送り出されて、夕方に家に帰ったら、今度は「**おかえりなさい**」です。しかしここ(「**いってらっしゃい**」)に本来、ある言葉が入ります。私たちがこの言葉を使わないんです。「**いってらっしゃい**」、「**おかえりなさい**」という言葉で表現していただけますよ。本来ここにも言葉が入るのですよ。送り出したほうが「**いってらっしゃい**」と言いつつ、そこにどんな言葉が入っているのか。

それぞれが学校や職場の中で学校の授業の時間、あるいは勤務時間が終わる、その一日というのは穏やかな一日ではないはずですよ。色んな事で失敗もし、挫折もし、怒られていかなん。大変な一日を送ってくる、それを「**いってらっしゃい**、ずっと待っているからね」と。「**おかえりなさい**、ご苦労さん、待ってたよ」と

いうことです。この気持があるんじゃないでしょうか。

「待っているよ」と「待ってたよなんです」。私たちは何気なく「いつてらっしゃい」、「おかえりなさい」とこう言っていますけれども、実は「あなたの帰りをずっと待っているよ」、「あなたの帰りを待っていたよ」と。これが私たちが学校や職場に行っている方々に対しての言葉ではないでしょうか。

それは同時にそれは仏さんの言葉でもあるということです。生まれたとという記憶もないまま、今日まで様々な歩みが続けて、迷い続けて、悲しみに出会い、苦しみに出会い、不安を抱きながら歩いてきた。その私を仏さんはなんと知っているか。「ずっと待っているよ」と言っているのです。何に。自分が生まれたという記憶の中にあつた、無条件であつた「もとのいのち」にかえつてくれということですか。「阿弥陀さんのいのち」と言われた時の自分の姿、いのちというものに帰ってくれませんかということですか。呼び声なのです。

仏法聴聞ということを通して今ま

で教えが難しい難しいと思っていたけれども、一番わからなかったのは自分のことではなかったかということ。自分のことが何ひとつ分からなかった。吉凶禍福のみを追い求めていて、自分が死すべき身をここにいただいていたという事実を忘れていた。その事実を教えてくださいのが声です。

「聞」来たりてきこゆ、本堂に入つてみたら、なんと私に呼びかける声が一番先に迎えてくれましたということ。その声によつて改めて気がついた、目が覚めた。目が覚めたら仏さんは何と言つてくれたか。「おかえりなさい、待っていたよ」と。待っていたよと言つてくれるんです。「本来のあなたの人間というものを取り返すときが今ここによくやっておりましたね、待ってたよ」ですよ。仏さん、私たちを黙つたまま送り出しているんですよ。長い長い仏法聴聞をして仏さんの願い、その声を聞くということがようやくおこつた、そのときに、「待ってたよ」というんです。

とき

そのとき、私たちに何がおこるかといったら「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」(『歎異抄』真宗聖典・六二六頁)があると親鸞聖人はいわれるのです。どなたにも必ず「とき」があるというのですよ。自分というもののあり様をもう一度訪ねなくてはならない「とき」があります。

人が生まれたとき、人と人が出遇つたとき、人が亡くなつていったとき、夏、一生懸命に蝉が鳴いたとき、秋の虫が鳴いたとき、そして紅葉のみみじが散つていくとき、そして冬を迎えて春、草花が一斉に咲き出すとき。「とき」とは「いのちのとき」です。いのちのときなんです。

人が生まれたとき、人と人が出遇つたとき、いのちのちが出遇う。人が亡くなつたとき、いのちが終わつていく。草花、虫たちが一生懸命、そのいのちを輝かせるとき、すべていのちと関わる「とき」ですよ。

そのときに改めて自分というものの中に思いの中に忘れ果てていたこ

とを甦らせるんですよ。その呼声がようやく聞こえてきました。『正信偈』の「歸命無量寿如来」、この言葉を通して私に声が聞こえてきました。そういえば生まれた記憶も忘れて、赤ん坊であつたという記憶も忘れて、そしてただ吉凶禍福のみを追い求めていたけれども、もう一度自分というものを訪ねてみたら、私は人間という身に生まれて、様々な苦しみを抱きながら、孤独の身を生き、最後亡くなつていかなければならない身、それは私やということ。その私のいのちの深さと厳肅さによく「とき」を得て目が覚めました。だから仏の願いを呼び起こす声が南無阿弥陀仏なんですよ。

それを昨日も申しましたように親鸞聖人や蓮如上人は、「称念仏」と言つたのです。「称」とは聞く人、私です。「私の中にちゃんと残っているものをもう一度呼び起こして下さい」と。呼び起こすことによつて、「ずっと待っていたよ」という声に出遇うていくんですよ。人間であるということを通じて回復する「とき」です。自分が人間に生まれてきたけ



「除夜の鐘」野間哲也

れども、その人間を忘れ果てていた、その人間を回復させる「とき」が、今まさに目の前の私たちに起こるんですよ。

それを真宗のご門徒の方々は「仏法聴聞」という言葉で言ったのですよ。「聴聞に限るぞ、聴聞せよ」と。「聴」だけだったら、これは自分の思いでしか聞けないけども、でも「聞」そういうことを通して外のものが聞こえるのではなくて、外のことを縁

としながら自分の中に眠っていたものを呼び起こされる、そういう声が聞こえてきましたよ。

人間の証

その声に出遇うた今年八十四歳になるおばあちゃんが、自分の家の近所におられます。二十歳で結婚をし、そして六十四年間本当に仏法を聴聞された方です。その八十四歳のおばあちゃんが、つい先達て私にこんな言葉をかけてくださいました。六十四年間仏法を聴聞してきた中で、おばあちゃんはこんなことを言われました。

「人間の証は、今日、数珠を持つこと」。ここ（「今日」と「数珠」の間）に言葉が入ります。嫁いできてからお寺のお参りに、お講に足を運んで六十四年間歩み続けてきて、今も歩み続けている方です。長い長い間聴聞してきた中で、私はこういうことだけは言える身になりましたと。そんな難しいことを言っていない。「人間の証は、今日も数珠を持つこと」。でも、私たちは違います。私たちはどうか。「今日は」です。「も」

でないんですよ。浄光寺さんの報恩講だから数珠を持つてお参りに行く。昨日は数珠を持つたらん。明日、報恩講が終わるから数珠を持つ必要はない。私たちは数珠を毎日持つていくかというところではないわけですよ。でもこのおばあちゃんは、今日も数珠を持つ。

「も」ということは「昨日も」です。前の日も、つまりずっと持ち続けてきた。「明日も」ですよ。数珠を持つてばどうなるか。数珠を持つてば皆さんもどうするのか。座るしかないですよ。ご本尊の前に座るしかないんです。座れば何に出遇うか。願ひに出遇う。光に出遇う。光に出遇うことによつて、自分がまさに迷い続けているということがわかるということですよ。決して何か良い者になろう、心の平安を願うような私になろう、マイナス思考をプラス思考に変えよう、心境を整えるために参るのではないのです。死すべき身を持つていることを忘れ、また私が生まれたということとを忘れ果てて生きているから参っていくのでしょ。

呼声

記憶にもない赤ん坊であった時、先に亡くなった方々はみんな無条件で私という存在を受け入れてくれた。その私がいつの間にか自力になつたのです。身と心と力と善根を頼むようになって何でも思い通りになると思い込んでいた私。その私に對してもう一度人間の原点に、出発点に帰ってみませんかという呼声、その呼声によつてはじめて私たちは人間であるということ、生まれたこと、死すべき身を持つていたということ、それを再確認をし、今ここにいますということを改めて確認し続けている、その歩みが私たちが何気なく申す「なんまんだぶつ」なんですよ。

「なんまんだぶつ」の一声の中に「南無阿弥陀仏」と出遇い、その「南無阿弥陀仏」の文字と言葉に触れることによつて、仏の願ひに触れる。その仏の願ひが「歸命無量寿如来」、その言葉を聞き取ってくださいと、呼声の声に出遇うてください。それがまさに「来たりてきこゆ」この本堂に来てみたとき、お内仏の座敷に

座って自分が『正信偈』をとえたと
とき、もう既に声となった願いに触
れるんですよ。だからお勤めって大
事なんですよ。お勤めが肝心なん
です。そのお勤めの声を通してな
ら、文字となった教えに出遇うていき、
我が身というものをもう一度確認を
していく、それが繰り返すよう
だけれども「仏法聴聞」と。

そのことを私たちに先輩方はこの
『安心決定鈔』の言葉を通して、も
と私たちは、しらざるべきのい
ちも阿弥陀の御いのちなんだ。自力
になってしまつて我がいのちと自分
の思い通りになるような生き方をし
ているからこそ、もう一度無量寿
しつれば、もとの阿弥陀のいのちの
世界に帰って下さいと。その声を聞
いていくということです。声に呼び
覚まされていく自分に出遇うていく
のです。

仏の願いとして「念仏申せ」と私
たちに呼びかけてくださる。「念仏
申せ、迷い続けて、方向も分からず
彷徨い続けている者よ、孤独を抱え
て苦しんでいる者よ、死すべき者よ、
念仏申してくれよ」ということです。

それが、私たちが何気なく申す称名
念仏です。「念仏申せ、迷い続けてい
る者よ、彷徨い続けている者よ、生
きることに苦しんで、悩んでいる者
よ、孤独の者よ、死にゆく者よ、念
仏申してくれよ」。生まれたという原
点、そのことに触れることによって、
もう一度自分の中にある願いが呼び
覚まされてくるのです。

迷い続けてきて、今日まで様々な
罪というものを重ねてきているけれ
ども、いのちそのものには、どこか
でこのいのちを満足したいと願つて
いる存在やということ。ただ吉
凶禍福のみを願っているのではない
のです、私たちは。一番奥底でいの
ちが本当に満足できる、充実した有
り様を訪ね願っている、それが人間
という存在。「その人間を取り返して
ください」、それがまさに南無阿弥陀
仏という言葉となつて私に響いてき
ているのではないかと思います。

この浄光寺さんの二日間の報恩講
で縁をいただきました、どうもあ
りがとうございました。

へんしゆうこうき
(仙崖和尚のお話)

和尚、下駄の鼻緒が切れて困つてい
たところ、女将が飛んで来て、すぐ
に鼻緒を挿げ替えてくれた。(嬉し
かったでしょうね！度々切れたもんで
すよ！) 和尚は女将に「やあ、ありが
とう！」と立ち去つた。

人助けした女将は気持ち良く、そ
の日を過ごすことができた。(そうで
しょうそうでしよう！其処までよ
かつたんです！) 翌朝、掃除してい
ると向こうから和尚がやって来た。
「てつきり昨日のお礼を言いに来たに
違いない」と。ところが「やあ、お
はよう！」とだけ言つて通り過ぎて
行つてしまった。(思惑が外れた！
がっかりだ！なんでや！)

気を取り直し女将は、「歳やから私
に気付かなかつたかも、道の真ん中
に立つて待つていれば」と。気になつ
て、店から出たり入ったり落ち着か
なかつた。

夕方、来る姿が見えたので、道の
真ん中に立つてみたが再び「やあ！」
と言つただけで通り過ぎてしまつた。
そこでですね、礼を言わぬ和尚に無
性に腹が立つて来た。(昨日和尚さん
の困つているところを助けてやつた
のはこの私だ。それなのに礼も言わ
ないとはどういうことか！)

その日、腹が立つた女将は次の日
には和尚の檀家のところまで行き、
事の次第を怒りに任せて口説きま
くつた。(いかにでもええのにな！檀
家も檀家だ、ほつておけばええもの
を！)

聞かされれば黙つておれん和尚
は、女将はそんなことを言っている
のか。確かに私を助けてもらったの
だから『大恩』に違いない。しかし、
人間というものは浅ましいもので誰
にどんな大恩を受けても、相手に
お礼さえ言えばその恩が帳消しになつ
たように思う。私は、そのようになつ
てしまふ自分が嫌だつたからこそ女
将から頂いたご恩を、私の心に留め、
死ぬまで頂いていこうと思つていた
のに！

せつかく頂いた大恩だつたが今か
ら行つて帳消しにでもして来ようか
ね？(そうだろうな！) つづく(受)

行事のご案内

「お太子さん」三月二十日・午後一時

法話 木村宣彰

「おてらくご」五月十日・午後七時

法話 浄光寺住職

落語 立川志らら

※入場無料！お気軽にお越し下さい